
未来シミュレーションゲーム

DIOrennji

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

未来シミュレーションゲーム

【Nコード】

N0282BA

【作者名】

DIOrrennji

【あらすじ】

僕こと住友心愛はとある事情で『変化』が嫌いだった。周りに気を使い、平均を目指し、善人である毎日。しかしある何気ない日、いつものようにパソコンを開いてみると、一般的にギャルゲと呼ばれるようなシミュレーションゲームのデータが。導かれるように起動してみると、実はただのゲームではなく、僕を主人公としたリアルと全く同じ設定のゲームだった…。

事件に巻き込まれ、もしもゲームで真実を見つけられずトゥルーエンドに到達出来なければ、待つのは“死”というバッドエンド達。

僕はただ、変化のない普通が欲しかっただけなのに。気分と
その場のノリで書いてるので、更新はランダムで文章の長さによら
ずあります。

6月27日「未来の事件」(前書き)

微弱のグロあります。

6月27日「未来の事件」

「う、嘘だ…!?!」

僕は目の前にある“ソレ”を見てしまった。赤色のトマトジュースにしてはぬめりのある液体を撒き散らし、辺りの温度を一段と下げている物。。

死体。それも先程まで生きていた。

「ッ　　お、えええ」

普段からこういう絵に馴れていた。つまりゲーム脳のお陰で容易に理解出来てしまった僕は、実物を前にして嘔吐しかける。

死体に驚いたというのもあったし、様々な感情が渦巻いたというのもあったけれど、単純に。

グロテスクすぎる。

どうして僕は、こんな事に巻き込まれたのだろうか。全ては、アレが来てからおかしくなった。

6月24日「学校」

桜田心愛。それが僕の名前。

女の子のような名前だったので、小さな頃はよくいじめられたりと苦労した。

その頃に、どうしてこんな名前にしたんだと両親に聞いてみたら。

「心の底から人を愛せる人になって欲しいから」

という安直すぎる由来に、子どもながら苦笑いをしたのを覚えている。

そんな一種の思い出を振り返りつつ、いつも通り放課後を迎えた教室で、自分の席で座っていると。

「心愛ー！」

僕の名前を呼ぶ声が、一時的に騒がしくなっている周りの雑音の中聞こえた。一周するように見渡してみると、ある少女がこちらに近づいて来ている。

「質桜さん、どうしたの？」

嬉しそうにやって来た少女に、僕も笑顔を向けながら聞いてみる。

彼女は質桜心愛。僕とは下の名前が同じ友達だ。

「やったよ心愛ー！ ついにあのゲームをクリアしたのー！」

「うん、おめでとー」

眼を輝かせながら息を荒げる質桜さん。

彼女とは高校に入る以前の友達の、よくこうしてゲームやアニメなどを話したりする。

「くうー、辛かった！！ 強かった！！ 半端じゃなかった！！」

右手に握りこぶしを作り、グツと堪える質桜さん。楽しそうだなあ…。

「幾多の苦勞を乗り越え、私はクリアした！！」

「おー」

ふふふ。とドヤ顔で佇む。

「そろそろ帰ろうか」

僕がそう切り出すと、質桜さんはいつもの表情に戻って。

「そっね」

と言ってくれるのだった。

6月24日「帰宅路」

僕は変化が嫌いだ。

変化は僕から何かを奪っていく。今も昔も彼らは無慈悲に、いとも容易く行つ。だから僕は変化を好まない。

例えば僕は人が嫌がる事も進んでやるし、困っているのなら助ける。そうしておけば良い人だと思われるし、なにより直接関わる事によって変化が拡大しない。

「いやー、今日は何しようかなあ」

そんな事を考える僕の隣では、学校指定の黒光りする四角のカバンを上下に振りながら歩く少女が一人。
質桜さんだ。

「勉強は大丈夫なの？」

半分心から、残りは作り笑い。

「ふっふっふ。対策に抜かりなしなのだ」

えっへん。と両腕を前で組みながら質桜さんは決めてくる。

事実、彼女は勉強が出来ない位置からはかけ離れていた。

テスト時には上から両手で足りる順位に入り、かといってそれを自慢する所か他の人に秘訣を笑顔で教え回ったりする程の、本当に良い人だ。

更にスポーツと料理は出来、その上で明るい性格なのでクラスから

は信頼を置かれている。

「そういう心愛はどうなの？」

質桜さんはくりくりとした黒色の瞳で、興味を含ませながら僕の顔を覗き込んでくる。

可愛い顔が間近まで迫って来ているので、僕は苦笑いをしながら答えた。

「いつも通りの中の上だよ」

人から恨まれず、それでいて文句の言われない位置。変化が少なく少し勉強するだけで良かったので、楽だった。

「ほむほむ」

質桜さんはこういった事からクラスの委員長を務め、僕も彼女の友人という事で同じく委員長になっているのだけだ。実はもう一つ理由がある。

「私と契約して学力を上げようよ！」

それがこれだ。

スラリとした体つきに整った顔、文武両道に人付き合いは良い。ただ、彼女は極度にアニメやゲームといった2次元の物が好きなので、一部の人以上は根本的には付き合えない。

引かれている訳ではない、むしろそれすら彼女はステータスにする。しかし委員長などの相棒となると話は違う、それで僕に白幡がたつた。

それだけの話。

「いや、契約すると僕が危ないよ」

僕の苦笑いに、彼女はにじし。と笑ってくれる。

僕はこれでいい。

例え偽りだろうと、変化のない普通を過ごせるのなら。

6月24日「家」

今日もいつも通り自分の家に辿り着き、玄関のドアを開けて家へと入る。

「あら、心愛さんお帰りなさい」

声と共に視界に入ったのは、ほわほわと辺りにタンポポでもあるかのように、柔らかく暖かな春の雰囲気を纏っている女性。
母さんだ。

「ただいま、母さん」

心の底からの笑みに、僕は作り笑いで答える。

くまさんが書かれたエプロン姿に、お鍋のお玉を片手に持っていた母さんは、にこにこしながらこつ声を掛けてくれる。

「今日はすき焼きだから、早く手を洗って食べにいらっしやい」

優しい。本当に僕のお母さんにしては惜しすぎる程に。

「うん」

僕は頷いて、靴を脱ぎながら廊下へと上がる。

素早く自室にカバンを置き、洗面所で手洗いを済ませてリビングへと向かう。

「おう、おかえり」

四角のテーブルについている四脚椅子に座っている男性が、僕に気付きなり白い歯を見せながら笑ってくれる。
「父さんだ。」

「ただいま」

僕もつられず、いつもの笑顔でいつもの席へとつく。
テーブルの上ではグツグツと良い匂いを漂わせているお鍋が一つ、お椀が三つ置かれている。

「はーはっはっは、今日はすき焼きだ！！ 驚いたろう!？」

「うん、母さんから聞いた」

「え、っ、てことはお前、驚かなかったのか!？」

「うん」

「ま、マジか…。そうだよな、お前ももう…」

僕には分からない何かを悟ったらしく、父さんはどこか遠くを見つめ始めた。大丈夫かな…。

「はいー」

ニコニコとほんわか笑顔を醸しながら、母さんがお椀につがれたご飯を持ってきてくれた。

「あ、すみません。手伝えなくて…」

僕が謝ると、母さんは椅子に座った後に答える。

「いいんです。いつも手伝ってくださってるんですから、今日から

いは何もしなくて」

「そうだそうだ、たまには休め」

「…うん、そうだね」

その後はすき焼きを家族で食べた。味は母さんが僕達の好みにあわせていたので、箸が止まる事もなかった。

こんな日が、いつまでも続けばいいのに。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0282ba/>

未来シミュレーションゲーム

2012年1月1日00時54分発行